2026年11月14日(土)

シンポジウム

16:20 ~ 17:50 | 第1会場（天瑞：4F）

[Sym] シンポジウム（運動器）

座長：遠矢 拓己（なかむら整形外科クリニック），矢野 剛士（獅子目整形外科病院）

16:20 ~ 16:40

[シンポジウム1] 運動器理学療法「躍進」のためのケーススタディ
ケーススタディを通して再考する運動器理学療法の臨床推論

田中 創 (福岡整形外科病院 臨床研究センター，福岡整形外科病院 リハビリテーション科，愛知医科大学 医学部 疼痛医学講座)

16:40 ~ 17:00

[シンポジウム2] 運動器理学療法「躍進」のためのケーススタディ
経験を言葉に、言葉を次の臨床へ
―変形性股関節症のケーススタディから考える臨床推論―

奥村 晃司 (社会医療法人玄真堂 かわしまクリニック)

17:00 ~ 17:20

[シンポジウム3] 運動器理学療法「躍進」のためのケーススタディ
腰痛に対する理学療法の解像度を上げる
―ケーススタディから学ぶ実践知―

多々良 大輔 (switch physio｜株式会社 オンボーディング)

シンポジウム

2026年11月14日(土) 16:20 ~ 17:50 | 第1会場（天瑞：4F）

[Sym] シンポジウム（運動器）

座長：遠矢 拓己（なかむら整形外科クリニック），矢野 剛士（獅子目整形外科病院）

運動器理学療法「躍進」のためのケーススタディ
田中 創（福岡整形外科病院 臨床研究センター）
奥村 晃司（社会医療法人玄真堂　かわしまクリニック）
多々良 大輔（switch physio｜株式会社 オンボーディング）

16:20 ~ 16:40

[シンポジウム1] 運動器理学療法「躍進」のためのケーススタディ
ケーススタディを通して再考する運動器理学療法の臨床推論

田中 創 (福岡整形外科病院 臨床研究センター，福岡整形外科病院 リハビリテーション科，愛知医科大学 医学部 疼痛医学講座)

16:40 ~ 17:00

[シンポジウム2] 運動器理学療法「躍進」のためのケーススタディ
経験を言葉に、言葉を次の臨床へ
―変形性股関節症のケーススタディから考える臨床推論―

奥村 晃司 (社会医療法人玄真堂 かわしまクリニック)

17:00 ~ 17:20

[シンポジウム3] 運動器理学療法「躍進」のためのケーススタディ
腰痛に対する理学療法の解像度を上げる
―ケーススタディから学ぶ実践知―

多々良 大輔 (switch physio｜株式会社 オンボーディング)

シンポジウム（運動器）

2026年11月14日（土） 16:20 ~ 17:50｜第1会場（天瑞：4F）

シンポジウム（運動器）

座長：遠矢 拓己（なかむら整形外科クリニック），矢野 剛士（獅子目整形外科病院）



［講師紹介］

田中 創（タナカ ソウ）

福岡整形外科病院 臨床研究センター
福岡整形外科病院 リハビリテーション科
愛知医科大学 医学部 疼痛医学講座

［職歴］

2003年4月 副島整形外科病院 リハビリテーション科 入職
2013年1月 九州医療スポーツ専門学校・付属クリニック 入職
2019年4月 福岡整形外科病院 リハビリテーション科 入職
2022年4月 愛知医科大学 医学部 疼痛医学講座 研究員
2024年3月 福岡整形外科病院 臨床研究センター 研究員（兼任）

［学歴］

2003年3月 西日本リハビリテーション学院 理学療法学科 卒業
2018年3月 畿央大学大学院 健康科学研究科 修士課程 修了
2022年3月 愛知医科大学大学院 医学研究科 博士課程 修了

［主な資格］

理学療法士，専門理学療法士（運動器），博士（医学）

［業績］

・Tanaka S, et al. Sex Differences in Preoperative Pain Intensity Among Patients Undergoing Total Knee Arthroplasty: A Propensity Score–Matched Cross-Sectional Study. Osteoarthritis Cartilage. 2026;34(5),707-715.
・Tanaka S, et al. “But it feels swollen!”: the frequency and clinical characteristics of people with knee osteoarthritis who report subjective knee swelling in the absence of objective swelling. PAIN Reports. 2021;6(4), e971.
・Tanaka S, et al. Identifying participants with knee osteoarthritis likely to benefit from physical therapy education and exercise: A hypothesis-generating study. Eur J Pain. 2021;25(2),485-496.

ResearchMap: https://researchmap.jp/loose_no_6

［主な社会活動］

日本運動器理学療法学会（理事）　日本理学療法士協会（代議員）
日本疼痛学会（代議員）　日本運動器疼痛学会（代議員）
日本ペインリハビリテーション学会（代議員）

［受賞歴］

第28回 日本ペインリハビリテーション学会学術大会 最優秀賞
第32回 福岡県理学療法士学会 優秀賞
第12回 日本リハビリテーション栄養学会学術集会 最優秀賞
第6回 日本運動器理学療法学会 大会長賞

シンポジウム（運動器）

2026年11月14日（土） 16:20 ~ 17:50｜第1会場（天瑞：4F）

シンポジウム（運動器）

座長：遠矢 拓己（なかむら整形外科クリニック），矢野 剛士（獅子目整形外科病院）

運動器理学療法「躍進」のためのケーススタディ
ケーススタディを通して再考する運動器理学療法の臨床推論

田中 創（福岡整形外科病院 臨床研究センター，福岡整形外科病院 リハビリテーション科，愛知医科大学 医学部 疼痛医学講座）

運動器理学療法におけるケーススタディは，単なる症例報告ではなく，個々の患者が呈する多面的な問題を統合的に理解し，臨床推論を深化させる重要な営みである．近年，エビデンスに基づく理学療法 (Evidence-Based Practice: EBP) の重要性が強調されている一方で，実際の臨床では，単一の病態や評価指標のみでは説明できない複雑な症例に遭遇することが少なくない．

特に運動器疾患では，構造的病態のみならず，疼痛メカニズム，身体機能，心理社会的因子，生活環境などが相互に影響し合うため，個別性を踏まえた統合的視点が求められる．ケーススタディは，こうした複雑性を可視化し，「なぜこの患者にこの問題が生じているのか」，「どのような評価・介入が必要なのか」を臨床推論として整理できる点に意義がある．

また，ケーススタディは，臨床で得られた実践知を共有し，新たな研究課題や仮説生成につながる重要な役割も担う．特に近年では，疼痛科学やバイオメカニクス，心理社会的評価など多面的評価が進む中で，症例を通じて病態理解を深める重要性はさらに高まっている．

本シンポジウムでは，運動器疾患に対する理学療法実践を例に，疼痛・機能・病態をどのように統合して臨床推論を行うのか，またケーススタディを通して理学療法実践をどのように深化させるかについて議論したい．

シンポジウム（運動器）

2026年11月14日（土）16:20 ~ 17:50｜第1会場（天瑞：4F）

シンポジウム（運動器）

座長：遠矢 拓己（なかむら整形外科クリニック），矢野 剛士（獅子目整形外科病院）



［講師紹介］

奥村 晃司（オクムラ コウジ）

社会医療法人玄真堂 かわしまクリニック

［職歴］

2000年4月　医療法人玄真堂　川嶌整形外科病院リハビリテーション科　入職
2001年3月　医療法人玄真堂　かわしまクリニックリハビリテーション科　異動
2006年3月　医療法人玄真堂　川嶌整形外科病院リハビリテーション科　異動
2013年4月　社会医療法人玄真堂　川嶌整形外科病院リハビリテーション科　主任
2016年4月　社会医療法人玄真堂　川嶌整形外科病院リハビリテーション部　病院リハビリテーション科科長
2023年4月　社会医療法人玄真堂　川嶌整形外科病院リハビリテーション部　統括科長
2023年5月　社会医療法人玄真堂　かわしまクリニックリハビリテーション科　異動

［学歴］

2000年3月　聖十字会　西日本リハビリテーション学院卒業
2006年4月　広島大学大学院　保健学研究科保健学専攻　博士課程前期　入学
2008年3月　広島大学大学院　保健学研究科保健学専攻　博士課程前期　修了　保健学修士

［主な資格］

保健学修士
日本理学療法士協会　専門理学療法士（運動器，スポーツ）

［業績］

【主な単・編著】

1）吉尾雅春(監)，福井勉(編)：標準理学療法学 [専門分野] 運動療法学 総論第5版：基本的運動療法 関節可動域運動：146-161．医学書院，2023
2）対馬栄輝(編)：人工股関節全置換術後の理学療法　明日の臨床を変える　Art & Science：股関節機能の評価：60-77．文光堂，2020
3）福井勉(編)：理学療法NAVI　エキスパート直伝　運動器の機能破綻はこう診てこう治す：骨盤側方swayを大きくする股関節症における治療効果を判定する重要な症候：15〜32．医学書院，2019
4）有馬慶美，三宮克彦，他(編)：実践編　ケースで学ぶ　理学療法　臨床思考　第2版：第1章　骨関節障害理学療法　変形性股関節症：44-57．文光堂，2019
5）永井聡，対馬栄輝(編)：股関節理学療法マネジメント　機能障害の原因を探るための臨床思考を紐解く：股関節の不安定性：229〜247．MEDICALVIEW，2018
6）福井勉(編)：新ブラッシュアップ理学療法　– 新たな技術を創造する臨床家８８の挑戦：歩行動作改善に対する骨盤側方運動の一視点：160〜163．株式会社ヒューマン・プレス，2017
7）福井勉(編)：ブラッシュアップ理学療法　88の知が生み出す臨床技術：股関節屈曲・伸展運動の機能的可動性を改善させる：211-214．三輪書店，2017

8）対馬栄輝(編)：筋骨格系理学療法を見直す　はじめに技術ありきの現状からどう新展開するか：運動学と理学療法の結びつきを見直すヒント：文光堂，2011
9）嶋田智明，他(編)：実践MOOK・理学療法プラクティス　変形性関節症　何を考え,どう対処するか：変形性股関節症の保存療法・手術療法：201～212．文光堂，2008

【筆頭論文・共著論文】

1）奥村晃司：視覚ベースの動作解析・評価　股関節　変形性股関節症保存療法の歩行動作介入例．PTジャーナル 59：379-382．医学書院，2025
2）奥村晃司：アライメントからみた股関節のスポーツ傷害と理学療法．理学療法 32：415-422．メディカルプレス，2015
3）奥村晃司：変形性股関節症の理学療法の工夫　治療方針と理学療法評価法・治療の一視点．PTジャーナル 48：615-623．医学書院，2014
4）奥村晃司：中高年の股関節の痛み　歩行時の股関節痛に対するアプローチ．臨床スポーツ医学 31：190-196．文光堂，2014
5）奥村晃司：変形性股関節症患者の歩行障害に対する教示法の実際．理学療法 26：1456-1467，メディカルプレス，2009
6）奥村晃司：変形性股関節症の保存的療法としての運動療法．Monthly Book MEDICAL REHABILITATION 80：15-24，全日本病院出版会，2007

シンポジウム（運動器）
2026年11月14日（土）16:20 ~ 17:50｜第1会場（天瑞：4F）
シンポジウム（運動器）
座長：遠矢 拓己（なかむら整形外科クリニック），矢野 剛士（獅子目整形外科病院）

運動器理学療法「躍進」のためのケーススタディ
経験を言葉に、言葉を次の臨床へ
―変形性股関節症のケーススタディから考える臨床推論―

奥村 晃司（社会医療法人玄真堂 かわしまクリニック）

日々の臨床では，これまで学んで得た知識だけでは解決できない患者に出会うことがある．評価結果から問題点を抽出し，病態を推論して介入しても，期待した変化が得られないこともある．経験を積んだ理学療法士は，患者の問題となる関節機能や姿勢，歩行などの運動・動作にみられるわずかな変化から問題を捉え，介入につなげる場面もある．なぜそのように考え，介入を選択したのかを問われたとき，その思考過程を十分に言語化できないことも少なくない．

変形性関節疾患の代表的な一つである変形性股関節症では，画像所見や病期が同程度であったとしても，疼痛，関節可動域，筋機能，歩行様式，活動量，生活背景など，患者が抱える問題はそれぞれ異なる．同じ病名であっても病態形成の過程は千差万別であり，患者に生じている症状や現象には，関節構造の変化のみでは説明できない多様な因子が複雑に関与している．既存のエビデンスや解剖学・運動学・病態学といった「理論知」をそのまま患者に当てはめるだけでは，目の前の患者に生じている現象を説明できず，十分な対応ができないことがある．

臨床では，患者を観察し，実際に触れ，その動きを確認し，介入に対する反応を確かめながら，「ここがおかしい」「ここに問題がありそうだ」と理論との違いを感じ取る．このような経験の中で培われながら，十分に言語化されていない「暗黙知」は，臨床判断を支える重要な要素となる．それを単なる経験や直感で終わらせるのではなく，理論知と照合し，評価により確かめ，介入と再評価を通して仮説を検証することで，変形性股関節症を患う患者を理解し，介入につなげる「実践知」へと発展させていかなければならない．

この知の往還が現れやすい臨床場面の一つが歩行観察である．患者に認められる跛行を，単一の筋力低下や関節可動域制限として捉えるのではなく，疼痛を回避するための戦略なのか，股関節への力学的負荷に対する適応なのか，骨盤・体幹や隣接関節による代償動作なのか，長期間にわたる代償によって獲得された運動戦略なのかを再考する必要がある．歩行という現象から，患者個々が抱える病態や症状，その背景にある要因を繰り返し推論することが臨床推論であり，そこには理論知と暗黙知の双方が関与している．

暗黙知のままでは，その経験は個人の中に留まる．ケーススタディでは，対象となる症例について，「何を見たのか」「なぜそう考えたのか」「何を根拠に介入したのか」「患者はどのように変化したのか」「その変化は仮説を支持したのか」を振り返る．無意識に行っていた臨床判断を言語化することで暗黙知は可視化され，理論知との照合を通して検証可能な実践知へと変化していく．

ケーススタディは，希少症例や成功した治療を提示するためだけのものではない．期待した反応が得られなかった症例や自らの仮説が覆された経験にも，臨床を前進させる重要な学びが存在する．なぜ期待した変化が得られなかったのか，なぜ自らの予測とは異なる反応を示したのかを問い直す過程にこそ，新たな気づきが生まれる．

症例がもつ「個別性」を深く掘り下げ，病態や症状，動作，治療に対する反応を丁寧に捉え直すことは，臨床の中で経験的，あるいは無意識に行ってきた判断を言語化し，自らの臨床推論を問い直す機会となる．その思考過程を他者と共有し，異なる視点から議論することで，自分一人では気づかなかった解釈や新たな仮説が生まれ，個人の経験は検証可能かつ共有可能な知へと発展していく．

こうして個々の症例を深く理解することは，その症例だけに通用する答えを導き出すことではない．そこで得られた気づきや問いは，類似する他の症例を捉える新たな視点となり，臨床における「普遍性」を見いだす契機となる．得られた知を次の患者の評価や治療に還元し，その結果を再び問い直すことで，新たな経験と学びが生まれる．

症例との臨床経験を言語化し，他者との議論を通して実践知として共有する．理論知と照らし合わせながら新たな知へと発展させ，再び臨床へ還元する．この循環を生み出すことに，ケーススタディの本質的な価値があると考える．

本シンポジウムでは，変形性股関節症の保存療法を題材として，ケーススタディを通して臨床推論を深め，一症例という「個別性」から臨床に応用可能な「普遍性」を見いだす価値について，参加者の皆様とともに議論したいと考える．

シンポジウム（運動器）

2026年11月14日（土）16:20 ~ 17:50｜第1会場（天瑞：4F）

シンポジウム（運動器）

座長：遠矢 拓己（なかむら整形外科クリニック），矢野 剛士（獅子目整形外科病院）



［講師紹介］

多々良 大輔（タタラ ダイスケ）

switch physio｜株式会社 オンボーディング

[職歴]

1997年　医療法人清幸会　土肥病院
1998年　医療法人三光会　誠愛リハビリテーション病院
2005年　医療法人正明会　諸岡整形外科病院・クリニック リハビリテーション科 科長
2011年　医療法人オアシス　福岡志恩病院　リハビリテーション部 部長
2023年　switch physio 代表
2025年　株式会社 オンボーディング 代表取締役

[学歴]

1997年　川崎リハビリテーション学院 卒業
2022年　九州看護福祉大学大学院看護福祉学研究科健康支援科学専攻（修士課程） 修了

[主な社会活動]

理学療法士として個人事業「switch physio」にて自費リハビリテーションを実践する一方，「株式会社オンボーディング」代表取締役として，整形外科クリニックのリハビリテーション部門に対する運営コンサルティング・セラピスト育成支援を展開している．臨床家と経営者という二つの立場を掛け合わせた視点から，医療従事者向けの講演やクリニックアドバイザー活動を通じて，理学療法士の社会的価値の向上に取り組んでいる．

https://www.instagram.com/onboarding.inc/

シンポジウム（運動器）
2026年11月14日（土）16:20 ~ 17:50｜第1会場（天瑞：4F）
シンポジウム（運動器）
座長：遠矢 拓己（なかむら整形外科クリニック），矢野 剛士（獅子目整形外科病院）

運動器理学療法「躍進」のためのケーススタディ
腰痛に対する理学療法の解像度を上げる
―ケーススタディから学ぶ実践知―

多々良 大輔（switch physio｜株式会社 オンボーディング）

【はじめに】

運動器疾患において腰痛は，理学療法士が日々の臨床で最も頻繁に出会う症状の一つである．しかしその原因や症状は多岐にわたり，画一的なアプローチでは対応できないことも多い．臨床経験の浅い若手理学療法士がよく直面する壁は，「評価データは集まったのに，どこから手をつければよいかわからない」という状況である．その結果，介入が固定化され，患者それぞれの問題に応じた対応が困難となる．こうした課題を乗り越えるための有効な学習手段が，ケーススタディである．実際の症例を丁寧に掘り下げることで，臨床推論の筋道を体験的に習得できる．仮説を立て，介入し，その結果から問題点を絞り込むという動的な思考プロセスを共有し，運動器理学療法の実践力を高めるためのフレームワークを提案する．

【ケーススタディが問う臨床推論の本質】

ケーススタディから学ぶ真の意義は，「正解を知ること」ではなく，「思考のプロセスを追体験すること」にある．臨床場面では，客観的な評価・計測・観察の手順化といった再現可能な「スキル」を土台としながら，そこから得られた断片的な情報を統合し，過去の症例や動作パターンとの類似性を直感的に結びつける能力―「iconicity（アイコニシティ）」―が問題の本質を見抜く鍵となる．そしてその直感に理論を重ね合わせ，最も可能性の高い問題点を推論する「abduction（アブダクション）」のプロセスを経ることで，はじめて最適な介入へとつながる「センス」が発揮される．

腰痛では，画像所見と臨床症状が一致しないケースも珍しくない．だからこそ，「なぜその評価を選んだのか」「なぜその介入に至ったのか」という推論の文脈が重要であり，ケーススタディの追体験は，こうしたセンスを育むための良質な学びの機会となる．まず「大きなフレーム」で介入の入口をつかみ，段階的に問題を絞り込んでいくという，シンプルで再現性の高い臨床推論の手順について，症例を通じて解説する．

【介入を「治療的検査」として捉える：仮説検証の実践】

立てた仮説に基づき，主要な機能障害に対して徒手療法，特定の方向への運動，安定性を高める介入などを「治療的検査」として試みる．そしてその直後の症状変化や動きの改善を「再検査」することによって仮説の妥当性を確かめた上で，エクササイズや日常生活での注意点の指導へと繋げることが重要である．ケーススタディにて，この一連の思考の流れを追うことで，介入を選ぶ根拠とその検証方法を一体として学ぶことができる．患者の反応をリアルタイムに受け取り，仮説を柔軟に修正しながら進めるこのプロセスの反復こそが，「なんとなくの介入」を「根拠のある選択」へと変え，臨床意思決定能力を高める．そしてその積み重ねが，センスの土台となる「iconicityのスキル化」―すなわち，パターン認識を再現可能な評価能力として構造化すること―へとつながっていく．

【おわりに】

センスは生まれつきの才能ではない．標準化されたスキルと，類似パターンを見抜く能力の積み重ねによって，習得可能なものである．

日常の臨床における運動器理学療法の「躍進」は，特殊テクニックの習得によってではなく，こうした地道な仮説検証の積み重ねによってもたらされる．ケーススタディはその積み重ねを加速させる優れた学習の場である．介入の結果を誠実に受け止め，仮説を修正し続けること――このプロセス自体が理学療法士としての専門性を育てる．本シンポジウムが若手理学療法士の皆さんにとって，臨床に自信を持って向き合うための一助となれば幸いである．